HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	歴史文化的発展過程からみたサッカーの指導方法に関する研究 : 教授プログラム作成の試み [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	佐藤, 亮平
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第12892号
Issue Date	2017-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67796
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Ryohei_Sato_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名　　佐　藤　亮　平

審査委員　　主査　　教授　　池田　恵子
副査　　准教授　　厚東　芳樹
副査　　教授　　竹田　唯史（北翔大学生涯スポーツ学部）
副査　　名誉教授　西尾　達雄

学位論文題名
歴史文化的発展過程からみたサッカーの指導方法に関する研究
―教授プログラム作成の試み―

上記の学位請求論文は、これまで学校体育において体系的な指導法が確立していなかったサッカーにおける技術・戦術指導について、サッカーの歴史文化的発展過程から戦術史を捉え、学校体育の学習者に適用可能なサッカーの指導方法に示唆的なプログラムを構築することを目的としたものであった。そのため、最終章では新たな指導プログラムの実践の一考察を試み、全体を補完している。

本論文がこれまでの研究に対し斬新であった点は、近年注目されているダイナミカル・システムアプローチやコンプレックスシステム論をサッカーの歴史文化的発展過程に即して解明しようとした点にある。具体的にはF. Lebedらによって近年精力的になされてきたコンプレックスシステム complex system 論を集団スポーツの「競技構造」として位置づけ、サッカーの戦術史はコンプレックスシステムの更新過程を通じて捉えられるとする。すなわち、システムがどのような質的な階層を有し、高度化するのかは歴史的に構築された様々な段階の戦術と合致しており、そのことが、サッカー文化をサッカーたらしめている文化的高度化のメカニズムに相当するとしている。そのように捉えることで、キック、ドリブル、タックルといった個別技術は、むしろ戦術システムとしての個々の段階の高度化に伴って付随して発展したと捉えるべきであり、指導法において、先行研究が課題としてきた「戦術学習論」の「個別技術」に対する優位性の議論に一定の正当性を与える見解を示したということになる。

以上は、次のような章立てにより議論された。第1章では『学習指導要領』に基づくサッカー指導に関わる成果と課題、欧米を中心に世界的な広がりを見せる「戦術学習論」の研究の成果と課題、学校体育研究同志会による「運動文化論」の成果と課題、日本サッカー協会による指導理論の成果と課題を検討することによって、既存のサッ

カー指導の成果と課題を概観し、本研究の課題を明確にしている。第 2 章では、集団スポーツにおけるコンプレックスシステム論に論及し、チーム戦術やシステムの位置づけを明確にし、サッカーの競技構造が明らかにされた。第 3 章では、第 2 章で用いたコンプレックスシステム論の有用性を基に 5 段階に区分けされる戦術史について検討し、戦術システムの質的階層を明らかにした。すなわち、1850 年代から 1925 年までの初期サッカーの段階では多様な戦法が地域毎に存在し、各地域でのサッカーが FA に集約される中でパスを中心とするパスサッカーが優位であったとされる。ついで、1925 年のオフサイドルールの改正も相まって、攻守の役割を明確にする「攻守分業制」のシステムが構築されたとする。「攻守分業制」が進むとこれを凌駕する新たなシステムを構築する必要性が高まり、攻守両面において役割をもつ中盤のポジションがシステム内に確立され、やがてフィールドの選手全体へ波及していく「全員攻撃・全員守備」の萌芽が 1950 年代以降に確立していくとされる。1980 年代末に「ゾーンプレス戦術」が導入されたことにより、両チーム間が 30m 以内に収まる時間的・空間的余裕の無い戦いが展開され、「守備と攻撃の一体化」が生まれ、「15 秒以内の勝負」という高速化した戦いが展開されるようになったとされる。そして、2006 年のワールドカップが転機となり、2008 年のヨーロッパ選手権大会において開発された新たなシステムである「攻守が一体化」する現代サッカーが誕生し、今もなお進化し続けていると論じられている。こうしたサッカー戦術の推移は、コンプレックスシステムの更新過程として分析されている。第 4 章では、システムを階層化し、「質的発展段階」に応じたグループ戦術及び技法を取り入れ、個々のサッカー技術や戦術との照合をはかることで、指導上の高度化の方針に合致するサッカーの技術・戦術構造の体系化が試みられた。

以上を受け、第 5 章では、技術・戦術構造における第 2 段階にあたる「攻守分業型」に即した中学校体育授業におけるサッカー指導のための指導プログラムが提示されている。具体的には守備を重視し、カウンター攻撃、サイド攻撃の 3 段階の戦術システムを教育内容とすることにより、個別技術はそれに伴うという着想を生かしたプログラム案であった。第 6 章では、そのプログラムに基づく実験授業を試みている。結果は概ね教育目標を達成することができるものであったが、審査委員会は、指導に用いるプログラムの修正・改善に向けて、今後も実験授業を積み重ねる必要があることを指摘している。他方、コンプレックスシステム論や詳細な戦術史に基づき、サッカーの指導方法を提示したことは新たなサッカー指導の可能性を切り拓くことにつながるという本研究の主張に一定の理解を示し、学位論文に相当する学術的見解が示されているという点で一致した。

よって著者は北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。